

## 〔研究ノート〕

# 平成26年度総合演習Ⅰの授業報告

## The Report on Basic Seminar I (2014)

中村学園大学 流通科学部

音 成 陽 子・福 沢 健

### I. はじめに

総合演習Ⅰは平成23年度に開講した演習科目（選択）である。その目的は、社会の様々な場面において求められる「思考力」の育成にある。「思考力」とは問題を発見し、その問題に関する情報を的確に収集・分析し、論理的思考を通して、問題の解決を行う能力である。

受講学生数は平成23年度87名、平成24年度79名、平成25年度79名、平成26年度69名の計314名となった。平成26年度は2クラスの開講となったため、受講者数が少なかった。本稿では、平成26年度の授業、およびグループ学習のあり方について報告する。

### II. 授業内容

論題「今後、〇〇業界で成長するのは△△だ」

を設定し、各業界の企業を指定し、比較を行わせた。自分たちの立場は決まっているが、差異はどこにあるか、有利な点は何かなど、戦略の違いについて2社の企業研究を行った。対象となる業界と企業は表1に、授業内容は表2に示した。

学生の活動はグループ学習を主として展開した。学生は、すべてのスケジュールを1つのグループで活動し、課題をやり遂げることは良い経験だったと感想を述べている。さらに、全体発表会（表3）では、大学院生も特別参加として発表した。同じ企業を論題としていたため、文献の扱いや立論の組み立て、発表の仕方などの違いは、学生にとって今後の専門科目の学びに刺激となったようである。

表1 対象とした業界と企業

業 界	企 業
総合スーパー	イオン株式会社
	株式会社セブン & アイ・ホールディングス
ドラッグストア	株式会社マツモトキヨシ
	株式会社サンドラッグ
家具・インテリア・生活雑貨	株式会社ニトリ
	株式会社良品計画
総合ネット通販	楽天株式会社
	ヤフー株式会社

表2 授業内容

回	授業内容	具体的内容	日程
1	(全体) ガイダンス クラス&グループの決定	・クラスとグループの決定 (役割分担) ・授業の進め方及び評価方法の説明 ・業界研究の方法	4月9日
2	文献を読む	調査対象企業に関わる文献を探し、 パワーポイントや発表原稿を作成する	4月16日
3	発表I (5分程度)	文献を使って、調査対象企業の優れている点や特徴を発表する (最低5分)	4月23日
4	(全体) プレゼンテーションを学ぶ	・プレゼンテーションを学ぶ ・三角ロジックの学習	4月30日
5	立論の作成	・三角ロジックの確認 ・対立する2企業の比較から論拠を探す ・論拠のために文献の再読、追加 ・パワーポイントの作成	5月7日
6			5月14日
7			5月21日
8	発表II (10分)	発表を聞いて考える。 ・三角ロジックが成立しているか。 ・反論できるか。	5月28日
9			6月4日
10			6月11日
11	討論 発表: 10分 討論: 10分	(1)プレゼンテーション ・声の大きさ ・聴衆への配慮 ・パワーポイントの構成 (2)内容 ・論理性 ・三角ロジック (事実・論拠・主張)	6月18日
12			6月25日
13			7月2日
14	(全体) レポートについて	最終レポートについての説明	7月9日
15	・レポート執筆 ・全体討論の練習	(1)レポート執筆 (2)全体討論に備えた練習 ・プレゼンテーション ・司会進行	7月16日
16	全体討論【公開】 発表: 10分 討論: 10分	(1)クラス代表による討論会 (2)社会人基礎力アンケート (後)	7月19日 (土)

表 3 全体発表会

期日	平成26年 7月19日 (土) 1・2時限 西2号館 5階2507R
スケジュール	1. 開会 2. 発表 ①イオン株式会社 (福沢クラス代表 1) ②株式会社ニトリ (音成クラス代表 1) ③楽天株式会社 (音成クラス代表 2) ④株式会社マツモトキヨシ (福沢クラス代表 2) 3. 特別発表 株式会社ニトリ 流通科学研究科 14M 院生 4. 表彰ならびに講評 5. 閉会
結果	最優秀賞：株式会社マツモトキヨシ 優秀賞：イオン株式会社
全体会運営	各クラスから 4名ずつ

### Ⅲ. グループ学習について

グループ学習は、学士力ではチームワーク、社会人基礎力ではチームで働く力として取り上げられ、学生に求められる学習成果のひとつである。安永 (2013) は協同学習の基本要素として①肯定的相互依存、②促進的相互交流、③個人の責任、④集団作業スキルの促進、⑤活動のふり返りと改善をあげている。それぞれ①信頼関係と貢献、②積極的学び合い、③個人やグループの学びに対する責任、④コミュニケーション力、⑤意思確認ということができよう。本授業において、学生が求められるものも同じだといえる。しかしながら、学生は作業効率や役割分担を重視して仲間に任せっきり (常態化)、個々が PC に向かう平行的な学びという状況が起きていることも否めない。大山ら (2013) は長期にわたるグループ活動、かつ分業を必要とする活動において積極的な活動をしない者 (フリーライダー) の発生が危惧されるという。したがって、グループとしての様々なスキルの向上を獲得できるようなグループ学習にする必要があるといえる。小田ら (2012) は、学生主体型授業における大人数の前で自分の意見を堂々と言うトレーニング、みんなの前でプレゼンテー

ションを繰り返すことの必要性を述べている。グループ内、クラス、全体で各々が自由に意見を交換できるような活動を保証する必要性もあるだろう。

グループ編成について安永 (2013) は、多くても 5～6 人、活動の組み立てやすさから 4 人を用いることを述べている。田中 (2003) は 5 人以上のグループでは積極的な活動をする者とそうでない者が生じること、学生の活動に対する自己評価が下がることを指摘し、4 人が適当であるという結果を得ている。さらに、安永 (2013) は多様な意見、幅広い視点を得やすい異質性が高いグループを提案している。本授業においては、4～5 人編成は行っているものの、カリキュラムや時間割の都合で、ほぼ同学年・同学部となっている。本年度は 12 グループ中、上級生が混じる 4 グループには、活動のまとまりの良さがみられた。

以上のことから、今後の課題として、学生間の意思・意見を交換する場の設定の工夫、異質性の高いグループ編成などがあげられる。また、プレゼンテーションの機会を保障するためには、1 クラスのグループ数も検討する必要があるといえる。

表4 受講状況

受講年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度
クラス数	3	3	3	2
受講者数	87人	79人	79人	69人
1クラスのグループ数	6	8	8	8
グループの構成人数	4～5	3～4	3～4	4～5
事前説明会	あり	あり	あり	なし
事前課題	あり	あり	なし	なし
受講後の所属なしのゼミ数	0	3	3	5

#### IV. 事前課題

2011年と2012年は、演題に沿った事前課題を課していた。しかし、本授業は選択科目で受講が未確定であることから、2013年と2014年は事前課題を課していなかった。そして、事前課題の内容は本時に組み込まれることとなった。つまり、演題に対してグループで1から積み上げる必要があるということで、ある程度の作業時間を要するといえる。既有知識の差は小さいものの、業界研究や企業研究が深化されないこともあるだろう。大山ら(2013)は、「事前課題がない場合、グループ学習および事後作業における学生の学びの深化が課題となり、課題が明確でなければ、議論が拡散してしまう恐れがある。」と述べている。また、事前課題があっても、既有知識の差がフリーライダーを顕著に発生させるという。事前課題を課した場合、グループ内での共有と教え合いを促すことが必要であり、課さない場合は明確な演題設定と作業時間の必要があるといえる。

#### V. まとめ

平成26年度の総合演習Ⅰは、2クラスで開講

し、事前説明会と事前課題の提示をせずに実施した。2年次前学期に配された科目であることを考慮すると、事前課題による既有知識をもって参加することが望ましいだろう。また、グループディスカッションを促し、教え合い、グループに貢献するという点から異質性をもった4人グループ編成が適切といえる。さらに、プレゼンテーションを繰り返し実施でき、クラス単位でも演題内容を深化できるとなると、グループ数についても検討が必要である。

#### 参考文献

- 小田隆治・杉原真晃(2012),『学生主体型授業の冒険2 予測困難な時代に挑む大学教育』,ナカニシヤ出版
- 大山牧子・田口真奈(2013),大学におけるグループ学習の類型化:アクティブ・ラーニング型授業のコースデザインへの示唆,日本教育工学会論文誌 37(2), pp.129-143.
- 田中 忠芳(2003),総合的学習を対象とした大学演習科目における学習グループ人数と自己評価・自由感想文の分析,日本教育工学雑誌 27(suppl), pp.229-232.
- 安永悟(2013),初年次教育学会編,「第5章 協同学習—授業づくりの基礎理論」,『初年次教育の現状と未来』, pp.69-81, 世界思想社